あなたと博物館

松本市立博物館ニュース　No.206　2016.9.1

明治30年代の開智学校

旧開智学校校舎創建140年！

記念特別展「旧開智学校校舎の魅力」を開催します

期間：平成28年9月17日㊏～11月27日㊐　※9月20日㊋、10月17日㊊、11月21日㊊は休館

会場：重要文化財旧開智学校校舎展示室　　料金：大人300円、小中学生150円

もくじ

誌上博物館 ◇ 旧開智学校を創建した大工棟梁 立石清重の業績……2-4
博物館TOPICS ◇ パネル展「松本のたてもの2016～たてものでめぐる松本の街道～」…5
◇ 企画展「旧制高校と出版芸術」／ガイドコーナー展覧会……6
◇ 9月21日は「松本市博物館の日」……7
博物館TOPICS◇松本市立博物館移転改築先決定 ‥8
ガイドコーナーはんてんぼく ……8

旧開智学校を創建した大工棟梁 立石清重の業績

重要文化財旧開智学校校舎が明治９年（1876）に創建されてから、今年で140年となります。「開智学校」の校舎を手掛けたのは、松本出身の大工棟梁立石清重（文政９年・1826～明治27年・1894）です。他に例を見ないといわれる天使と竜の車寄や色ガラスがはめ込まれた八角塔屋が象徴的な校舎は、漆喰系擬洋風建築の代表作と評価されており、設計・施工者である立石も地方擬洋風建築の代表的な担い手と評価されています。

しかし、これまで、「開智学校の立石」という点が強調され、立石のその他の建築にはあまり注目が集まりませんでした。立石は開智学校を手掛けた後も、松本地域を代表する棟梁として活躍し続けます。手がけた作品の全貌を捉えることは困難ですが、残された資料から改めて立石清重の生涯を追ってみたいと思います。

立石の主な業績は、下の年表の通りです。年表から立石の生涯にわたる活動は４期に分けることができそうです。以下に、各期の建物とその特徴について紹介していきます。

Ⅰ期　江戸時代から明治初期の藩・官庁請負期

この時期は、松本城関係の修繕、「教育局御用」や「博覧会請負」といった、松本藩や筑摩県関係の活動が多く確認できます。立石は、江戸時代は松本藩関係の「御用」を、明治維新後は筑摩県の仕事を請負ったようです。また、個人の邸宅や修繕の仕事は生涯を通して常に請負っています。この時期の建物に関する写真は残っていないため、建築的な特徴を追うことは難しいです。

Ⅱ期　開智学校を中心とした前期擬洋風期

立石の生涯のハイライトといえるこの時期の代表作は、もちろん開智学校です。開智学校は、規模・デザインの独創性などをみても、立石の最高傑作ですが、この時期は他にも特徴的な建物を完成させています。それが写真に示した、洗馬学校と長野師範学校松本支校です。洗馬学校は「藤村式」と称される、山梨県で隆盛した様式とよく似ています。左右対称で校舎の前面には回廊が設けられ、藤村式の特徴をよく表しています。しかし、藤村式では屋根の上に塔屋がつく形が一般的ですが、洗馬学校は塔屋ではなく開智とよく似たデザインの３階部分が乗っています。藤村式の様式を再現するだけでは飽き足らなかったのか、立石の独創性が強く発揮されています。

洗馬学校（明治10年）

異なる様式を上下に重ねることはすでに開智学校で試みられた手法です。開智学校の車寄の１階と２階部分は、それぞれ東京大学の前身である開成学校の要素を上下に組み合わせたものと指摘されています。開成学校正面の車寄は開智学校車寄せの１階部分に、開成学校正面両脇の唐破風付の入口は開智車寄２階部分に、それぞれよく似ています。この２つの要素を上下に組み合わせて開智学校の車寄の形が出来上がったと考えられています。藤村式の１・２階に開智系の３階部分を組み合わせた洗馬学校は、開智学校車寄と同様に上下重ね型の独創的な建物です。

長野師範学校松本支校（明治10年）

■ 立石清重　主な業績（各建物の写真や関連資料は特別展で公開します）

年代	明治7年以前	明治8年	明治9年	明治10年	明治11年	明治12年	明治13年	明治14年	明治15年	明治16年
西暦		1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881	1882	1883
年齢		46	47	48	49	50	51	52	53	54
主な業績	Ⅰ期（藩・官公庁請負）	Ⅱ期（前期擬洋風建築期）			Ⅲ期（定型官公庁舎等の和風建築）					
	二の丸御殿修繕 病院・博覧会など	開智学校 長野師範学校松本支校 洗馬学校 石油会社・生糸会社			松本裁判所 大町裁判所		明治天皇行在所	裁判所		個人邸宅や学校修繕

※旧開智学校所蔵の立石清重建築帳面や、各学校の記念誌・沿革史を参考に作成しました。（立石の建築物の全てを掲載してはいません。）

洗馬学校とほぼ同時期に工事が進められた長野師範学校松本支校は、外観がガラリと変わり、ややシンプルな装飾の中、正面の八角塔が目立つ校舎です。図面を見ると八角塔の位置が校舎正面の中心からズレていたり、L字型の平面計画など開智学校と類似する点がいくつか見受けられます。

開智学校の工事が始まった明治8年4月から明治10年の間に、全く違うデザイン・様式の擬洋風校舎を3棟完成させたというのは驚くべきことです。洋風建築の情報が不足する中、立石は山梨や東京などの建物見学で学んだ洋風建築の様々な要素と伝統的技法を縦横無尽に組み合わせ、3棟校舎を誕生させています。デザインの異なる建物をほぼ同時期に3棟も完成させたことは、立石の設計能力が突出して優れていたことを示しています。また、3棟以外にも生糸会社や石油会社、個人の住宅といった仕事も請負っており、各現場を取り仕切る施工監理能力も優れていたことが推測できます。

Ⅲ期　定型官公庁舎などの和風建築請負期

松本に擬洋風建築を一気に花開かせた立石ですが、明治11年以降、パタリと擬洋風作品が確認できなくなります。この時期を代表する作品は、松本裁判所です。和風の建物が3棟連なっており、擬洋風的な要素はほとんど確認できません。この期は他に、大町裁判所や上諏訪裁判所などの裁判所建築や明治天皇巡幸の際の行在所といった仕事を請負っています。いずれも和風建築であり、立石の建物にしては華のない印象を受けなくもありません。裁判所建築は国の司法省との仕事であり、司法省の定める建築様式が和風を基準としていたとも考えられますが、当時の社会情勢も立石の活動に大きな影響を与えていました。開智学校創建前後まで、擬洋風建築は新時代の象徴としてもてはやされていました。しかし、莫大な工事費や耐久性の欠如などの問題点が徐々に目立つようになり、擬洋風建築への懐疑的なまなざしが強くなります。

松本裁判所（明治11年）

学校は質実剛健な和風の建物がふさわしいという考えも起こるようになりました。開智学校も建築時からの借金が膨れ上がり閉校騒ぎを起こすまでになり、地元の教育雑誌に洋風校舎は不要との意見も掲載されました。このⅢ期は、擬洋風建築への批判や自由教育令による全国的な学校の衰退期と重なっており、擬洋風建築の要望が少なかったと思われます。佐久市の中込学校を造った市川代次郎が、竣工後、膨大な建築費がかかったため地元に居づらくなり、県外へ転出したという話があります。立石も擬洋風的な建物を自粛せざるを得なかったのではないでしょうか。

Ⅳ期　立石組としての活躍が目立つ後期擬洋風期

全国的な学校の衰退期が終息し、開智学校の経営が立て直されはじめた明治18年、立石の手がけた擬洋風の長野県中学校松本支校が竣工しました。これを境に立石は再び活発に擬洋風建築を手掛けるようになります。この期の立石は、長野県県会議事堂や長野県松本中学校校舎増築などの県事業、郡・市町村の役所や学校など、様々な相手か

長野県県会議事堂（明治20年）

明治17年	明治18年	明治19年	明治20年	明治21年	明治22年	明治23年	明治24年	明治25年	明治26年	明治27年
1884	1885	1886	1887	1888	1889	1890	1891	1892	1893	1894
55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65
	Ⅳ期（後期擬洋風建築期）									
	長野県中学校 松本支校		長野県県会 議事堂		東筑摩郡 高等小学校		東筑高等小学校 片丘分教場 ※仕様書・図面	麻績学校		
		島立学校		郵便電信局		大町 平林邸 ※仕様書のみ		松本中学校 増築	三松屋蔵座敷	

ら建築を請負います。しかし、県会議事堂や麻績学校の工事をみると、棟梁は立石の名になっていますが、実際に現場を仕切っていたのは副棟梁などと記される中村安次郎や佐々木嘉重で、立石が常に現場で陣頭指揮をとっていたのではなかったようです。他にも、大町平林邸（現塩の道ちょうじや、旧塩の道博物館）や東筑摩郡立高等小学校片丘分教場などのように仕様書や図面の作成のみ請負い、施工は別の棟梁が担うといった例もあります。中学校竣工時にすでに56歳となっていた立石は、現場の第一線からは距離を置き、主に設計や自ら率いる職人集団の各現場への割振り、工事資金の管理などを行っていたと考えられます。この期の建物の特徴は、立石には珍しい下見板系の建物が造られていることです。下見板系の建物は県会議事堂と県立松本中学校増築の2棟のみで、県発注の仕事は下見板張りが基本形式となっていたとも考えられます。郡立や市町村立はしっかりとした形式が定まっておらず、立石得意の漆喰系擬洋風となったのではないでしょうか。

明治10年代になると、徐々に公共建築の形式化が進み、長野県でも明治16年に「小学校建築心得」が布達され、小学校建設の基本方針が示されました。国・県と次第に形式化の波が広がっていき、徐々に擬洋風建築の独創性が抑えられていきました。明治20年代に日本人建築家の活躍がはじまると、正式な建築ではないと擬洋風建築そのものが下火になってしまいます。Ⅳ期は、日本人建築家が活躍を始める時期と重なりますが、立石は発注者からの特段の指示がない限り、自らの得意とする漆喰系擬洋風を創り続けました。立石は明治27年、擬洋風建築の終焉期に死去しました。立石は擬洋風建築の棟梁のまま、その終息に合わせるようにこの世を去っていったのです。

立石晩年の擬洋風建築

立石が死去する明治27年1月、現在確認できる中で、立石が施工まで請け負った最後の建物である旧三松屋蔵座敷（松本市はかり資料館に移築され現存）が竣工しました。外見は和風の押縁下見で被われ、入口に控えめなペディメント（三角破風）がついている一見地味といってもいい建物です。しかし、この建物の真骨頂は内部の造り方にあります。1階は茶室を備えた畳敷きの和室が並び、2階は板床の洋間となっています。和風の建物と洋風の建物を同敷地内に併設する例はいくつもありますが、和室と洋室を上下に重ねてしまうのは、当時としては非常に珍しいといえます。開智学校や洗馬学校で見せた、異なる要素の上下重ね型の形式がここでも発揮されています。立石晩年の建物は、やはり立石らしく独創性にあふれた擬洋風建築でした。

旧三松屋蔵座敷（明治27年）

大工棟梁立石清重の生涯

立石は明治維新を39歳で迎えました。立石の大工としての技能は、江戸時代に和風建築を手掛けた中で培われたものです。壮年となり、最も脂の乗り切った時期に明治維新を迎え、それまでと全く異なる洋風建築に取り組むことになった時、立石を支えたのは、江戸時代に培った伝統的な建築技術と、西洋文化を積極的に取り込む立石自身の好奇心でした。東京へ洋風建築の見学に行った際、立石はカメラや牛肉などの西洋文化もたびたび楽しんでいます。また、使わなくなった建築帳面に西洋新聞の広告絵をスクラップしており、西洋文化に強い興味関心を持っていたことがわかります。こうした立石個人の能力や性格が、木造寄棟・漆喰といった伝統的な建築技術の上に、ガラス・ペンキ・天使といった洋風要素が混ざり合った開智学校を誕生させたといえるでしょう。

立石の独創性は、仕様のみの請負いや現場から離れることが多くなっても、終生発揮され続けました。もちろん、西洋建築に関する本格的な勉強をしていないため、開智学校においても、窓が出入口となっているバルコニーや、扁平でつぶれたアーチ窓など、多くの部分で正規の建築様式から外れた表現方法が目立ちます。しかし、西洋建築の情報が乏しい中、時代の要請に応えて、全く新しい擬洋風建築を数多く作り上げた、立石のエネルギーは特筆すべきものです。

立石は、最後まで自らの事を「大工棟梁」と記します。日本人建築家誕生前、近代建築の黎明期において、地方の建築界を支えたのは、江戸時代からの流れを汲み、地元の職人集団を束ねて、設計・施工まで請け負った大工棟梁たちでした。松本地域の職人集団を率いて、近世で培った技術に西洋建築の技術を混ぜ合わせ、正規の建築様式だけにとらわれず独創的な建物を建築し続けた立石は、まさに近代初頭の「大工棟梁」の代表的な人物といえるでしょう。

（重要文化財旧開智学校校舎　学芸員／遠藤正教）

パネル展「松本のたてもの2016～たてものでめぐる松本の街道～」

「松本のたてもの」展は、松本に残る古い建造物や建築についてより深く知っていただくため、地元で活躍する建築士の方々と協働で開催しているもので、今年で３回目になります。

今年は、「たてものでめぐる松本の街道」をテーマに開催します。松本は、城下町として政治の中核であり、また、物資の集散地としての機能ももっていました。そのため、善光寺道や千国街道など、いくつもの街道が通っています。

現在でも、旧街道の道筋や宿場を思わせる建物は残っています。しかし、かつては地域のメインストリートとして多くの人と物が往来した街道も、現在では主要道の抜け道になってしまいました。また、街道がその機能を失ったのと同じく、かつては商店や宿屋だった街道筋の建物も機能を失って壊され、街道全体がかつての面影を失いつつあります。

本展では、松本の街道のなかから、善光寺道と野麦街道の建物をご紹介します。建物がなくなり街道の面影が消える前に、それらを記録保存し公開することで、多くの方々に松本の街道筋の建物を知っていただきたいと考えています。

善光寺道

中山道の洗馬宿（塩尻市）から北に分かれ、松本市内を北上し、善光寺に至る道です。北国西脇往還とも言われます。

松本市内には、村井・出川に間宿（あいのしゅく）（宿場間の距離が長い場合に設置された宿）、松本（本町、中町、東町）・岡田・刈谷原・会田に宿が設けられました。各宿場町には、街道筋に面した建物が残されており、現在でも街道の雰囲気が残っています。

善光寺道筋の建物（四賀地区会田）

野麦街道

野麦峠を経由して松本と飛騨高山を結ぶ道が野麦街道です。飛騨道とも言われます。飛騨地方出身の工女たちが諏訪地方の製糸工場に通ったことや、年取り魚のブリが富山湾から運ばれた道として知られています。梓川の急峻な渓谷に沿って狭い道が続き、街道筋の集落には宿屋がありました。

安曇や奈川の山岳エリアの街道筋では、善光寺道とは異なる構造の建物がみられます。

野麦街道筋の建物（奈川地区入山）

おわりに

街道筋の建物は、そのまちの顔と言えます。松本には様々な顔をもつ街道があり、それが都市としての歴史や文化の豊かさを感じさせるのではないでしょうか。今後も、歴史の里では、敷地内で公開している５棟の歴史的建造物だけなく、市内各地に残る建物も調査し紹介していきます。

（松本市歴史の里　学芸員／千賀康孝）

パネル展「松本のたてもの2016～たてものでめぐる松本の街道～」

会　期　9月24日㊏～12月23日㊎㊗
（月曜休館※祝日の場合は、翌日休館）

関連事業

展示説明会

日　時　9月24日㊏10時30分～正午
講　師　市内在住の建築士
料　金　通常観覧料（大人400円、中学生以下無料）
申込み　不要

講演会

街道筋の建物の特徴について

日　時　10月22日㊏10時30分～正午
講　師　梅干野成央 氏（信州大学工学部准教授）
料　金　通常観覧料（大人400円、中学生以下無料）
申込み　電話で松本市歴史の里まで

旧制高等学校記念館 Tel.0263-35-6226

企画展「旧制高校と出版芸術」

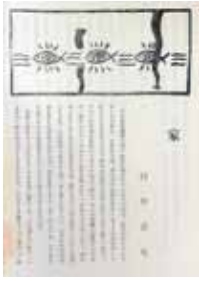
10月8日㊏～12月4日㊐(月曜休館※祝日の場合は、翌日休館)

「背丈ほどの本を読め」と教えられ、哲学書を始めとして多くの本を読んでいた旧制高等学校の学生たち。彼らは豊富な読書経験を基に、仲間たちと校友会誌・寮誌・クラス誌・部誌など、多様な出版物を発行しました。中には、表紙画や挿画により本の見た目にも工夫を凝らした冊子も多数残っています。

旧制松本高等学校文芸部の『校友会雑誌』第10号は、後に文壇で活躍する臼井吉見を「編集・発行人」として発行されました。題字を工夫し、挿画を取り入れた第10号の装丁は、掲載作品とともに、臼井の発行責任者としてのこだわりを今に伝えます。

『小水夫』は、第一高等学校、東京帝国大学を経て第六高等学校の名物教授となった山岡望が中心となり、兄や従兄弟らと作成した雑誌です。山岡が12歳の頃から10年以上に渡って作成され、小説・時事などが掲載されました。

今回の企画展では、こうした学生たちが創意工夫を凝らした冊子や、彼らに影響を与えたと想像される、見て楽しい、美しい出版物を紹介します。



『校友会雑誌』第10号　大正15年(1926)発行

『小水夫』第67号
明治42年(1909)発行

会　場　旧制高等学校記念館　ギャラリー
料　金　無料※常設展示は通常観覧料が必要

平成28年度國學院大學

学びへの誘い
『江戸文学の世界』－江戸戯作と庶民文化－

國學院大學で所蔵する江戸文学の代表作品を展示し、出版文化としての江戸文学を通観します。

栗毛野次馬

会　期　9月10日(土)～9月25日(日)
午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
※9月12日と20日は臨時開館、
最終日は午後4時30分まで

会　場　松本市時計博物館　3階企画展示室
料　金　入場無料(1、2階常設展示は通常観覧料が必要です)
問合せ　松本市時計博物館へ(☎0263-36-0969)

記念講演会「芭蕉―変化の人―」

日　時　9月10日(土)午後2時～午後3時30分
会　場　本町ホール(松本市時計博物館4階)
講　師　國學院大學文学部教授　岡田哲 氏
料　金　無料
申込み　電話で松本市時計博物館へ

秋季企画展

「よみがえる松本城下町」

発掘調査で出土した遺物をもとに、かつての松本城下町の姿を探ります。

会　期　9月17日(土)～11月27日(日)
会　場　松本市立考古博物館
第2展示室
料　金　通常観覧料(大人200円、
中学生以下無料)
問合せ　松本市立考古博物館へ
(☎0263-86-4710)

餌猪口

9月21日は「松本市博物館の日」

9月21日は、松本市博物館の日です。この日に、松本市立博物館の前身施設である「明治三十七、八年戦役紀念館」が、松本尋常高等小学校（現開智小学校）男子部内に開館したことに由来します。

この日を記念して、平成11年に制定されましたが、全国的にも珍しい記念日です。多くの方にもっと博物館を身近に感じてもらえるようにと、この日は松本まるごと博物館全館を無料開館し、各館で記念事業を開催しています。

博物館の誕生

「明治三十七、八年戦役紀念館」の誕生は、日露戦争に出征した松本町（当時）出身の兵士が、敵兵の肩章などを松本尋常高等小学校に贈ったことがきっかけです。また、松本町から出征した兵士のほとんどは同校の卒業生で、戦地からの手紙に添えて戦利品などを贈ってきました。当時の三村寿八郎校長はこの行為に感激し、校舎の一室を時局室と命名し一点ずつに説明を記して、資料の陳列を行いました。日露戦争後、出征兵士の帰郷が始まるにつれ、資料の寄贈はますます増えていき、時局室での陳列が困難になりました。三村校長は小学校の敷地内に新たに陳列館を設立し、明治39年9月21日に開館を迎えました。この施設は、「明治三十七、八年戦役」（日露戦争）の記念品を陳列公開することを目的に設立されたこともあり、「明治三十七、八年戦役紀念館」と命名されました。当時の新聞記事には、松本町を挙げての開館式の様子が描かれ、小学校の附属施設の開館というよりは、松本町立博物館の開館としての期待が込められていたようです。開館は松本市が誕生する7ヶ月前の出来事でした。

松本尋常高等小学校の敷地内に建てられた紀念館

博物館の日制定と記念事業の実施

今年で18回目となった「松本市博物館の日」では、来館者に親しんでもらえるような様々な事業を行っています。制定当時から、博物館の日記念オリジナルグッズの配布や各種事業を開催し、市立博物館開館100周年を迎えた平成18年からは、市立博物館の本館・分館全施設の無料開館を実施しています。

今年も9月21日（水）は、各館毎にクイズラリーの実施、普段は公開をしていない資料や建物の特別公開などを行います。

クイズラリー：松本市立博物館　記念品配布の様子

特別公開：民芸館 蓑の虫干、歴史の里 正門開放

おわりに

みなさんが博物館へ足を運ぶ機会はどのくらいあるでしょうか。博物館というと、学習の場や調査・研究の場といったイメージがまだまだ強いようですが、もっと多くの方に親しんでもらい、ご利用いただければ幸いです。

松本市の博物館の歴史は古く、地域に根差した事業を展開しています。今後とも皆様の身近に感じられる博物館を目指して事業を行っていきますので、どうぞお気軽に足をお運びください。

（松本市立博物館　事業担当／花村圭介）

松本市博物館の日

日　　時　9月21日㊌
対象施設　松本まるごと博物館全館
記念事業　無料開館、記念品配布、特別公開など
問 合 せ　松本市立博物館（0263-32-0133）

博物館 TOPICS

松本市立博物館の移転改築先を松本市営松本城大手門駐車場北側敷地一帯に決定しました

松本城およびその周辺整備計画（平成11年9月策定）以来、長年の懸案となっていた松本市立博物館（松本市基幹博物館）の移転改築先が、現在の松本市営松本城大手門駐車場の平面式駐車場及び北側立体駐車場の敷地部分に決定しました。

建設予定地は、松本市基幹博物館基本計画（平成21年3月策定）の「建設場所」として挙げられた項目に適合し、松本城三の丸地区整備基本方針（平成27年3月策定）にも適合する場所であり、国宝松本城をはじめとする松本の歴史・文化を学び、学都松本を創造する拠点となる基幹博物館としてふさわしい場所です。

また、こうした場所に基幹博物館が整備されることにより、多くの市民・観光客が深く松本の歴史・文化に親しみ、各地に点在する博物館あるいは街なか・地域へと回遊する流れが創出され、松本まるごと博物館の発展が期待されます。

松本市立博物館では、平成28年度末までにこの基幹博物館の姿を具体化していくために、「松本市基幹博物館施設構想」の策定を進めます。

松本市営松本城大手門駐車場北側敷地一帯の様子

施設構想では、各分野の専門家のご意見を伺いながら、建物の規模や諸室の面積、位置関係など各種設計を進めるための諸条件の整理を行います。あわせて松本市民のための博物館にしていくため、皆さまのご意見を伺い、施設構想に反映していくよう機会を設けていく予定です。引き続き皆さまのご理解とご協力を賜りますよう、お願いいたします。

（松本市立博物館　庶務係／堀井亮彦）

ガイドコーナー はんてんぼく

秋のまる博 その他の展示スケジュール

詳細はホームページへ！ http://www.matsu-haku.com/ まる博 検索

館名称	9月	10月	11月
松本市立博物館	■子規忌展 9/10㊏～25㊐ 9/19㊊㊗●子規忌	■松平直政没後350年パネル展 10/1㊏～11/27㊐	
松本民芸館	■企画展「やちむんの里　沖縄の民芸」 8/30㊋～12/18㊐		
松本市はかり資料館		■企画展「今昔はかり展」10/28㊎～11/27㊐ 11/3㊍㊗●計量記念日事業【無料開館】	
窪田空穂記念館	■秋季企画展「老いてなお輝く」 9/17㊏～11/27㊐		
重要文化財馬場家住宅	■パネル展「遺産としての馬場家住宅」 9/1㊍～9/15㊍	■企画展「横内勝司写真展」―くらしの情景― 10/1㊏～11/3㊍㊗	

市立博物館から ☎0263-32-0133

復活　話をきく会
「胡桃沢勘内の郷土教育論―郷土科と『郷土学習帳』―」

日　時　9月17日（土）午後2時～午後3時30分
会　場　松本市立博物館　2階講堂
受講料　無料（通常観覧料が必要）
講　師　伊藤純郎氏／筑波大学人文社会系教授

重文馬場家住宅から ☎0263-85-5070

名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター公開講座「馬場家文書と馬場家住宅が語る文化と歴史」

日　時　9月10日（土）午後1時～5時
会　場　重要文化財馬場家住宅主屋
受講料　無料
定　員　30人（高校生以上）
内　容　講演1「高島藩主の巡見と馬場家」
石川寛／名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター特任准教授
講演2「明治初期の旧婚旅行―馬場家12代当主夫妻の旅をたどって―」
服部亜由未／名古屋大学重要文化財馬場家住宅研究センター招へい教員
第Ⅱ部　馬場家住宅の魅力発見
見学とワークショップ「私が選ぶ馬場家住宅の魅力」

いずれも申し込みが必要です。申込方法や詳細についてはまる博ホームページか各館へお電話ください。

あとがき

実は不思議な旧開智学校。右のロゴマークにも不思議なポイントが。
校舎裏から撮影した表紙の写真と比べると分かりやすいかも？
答えを知りたい方は旧開智学校へ！

（M.E）

あなたと博物館 No.206
発行年月日/平成28年9月1日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL：http://www.matsu-haku.com/
e-mail：mcmuse@city.matsumoto.nagano.jp
印刷 川越印刷株式会社